

「ショート・ライフストーリー」による インタビュー調査 —アトキンソンの方法論を中心に—

Investigating the Interview through 'Short Life Stories': Focusing on Atkinson's Methodology

小 西 尚 之

KONISHI Naoyuki

1. はじめに

社会学や心理学の分野ではライフストーリーの研究方法が注目されている。ライフストーリーとは、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的（ホリスティック）に読み解こうとする質的調査法の一つ」（桜井 2012, 6 頁）である。ライフストーリーが研究資料として使用される際には通常、「インタビューによって個人の経験的語りが録音され、文字おこし（トランスクリプトの作成）がなされ、一つのまとまりをもった語りとして再構成されたもの」（桜井 2012, 6 頁）が用いられる。

以下では、まずライフストーリーに関するアメリカの代表的なテキストであるアトキンソン（Atkinson 1998）の方法論を中心に、ライフストーリーとはどのような研究方法かを確認し（第2節）、他の研究方法（ライフヒストリー、オーラルヒストリー）との比較からその特徴を整理した上で（第3節）、インタビューの実施に関わる具体的な方法論について紹介する（第4節）。さらに、このようなアトキンソンの方法論を踏まえた上で、高校卒業生という若年者に対する追跡パネル調査にライフストーリーを適用する場合（「ショート・ライフストーリー」）の可能性について検討する（第5節）。最後に、ライフストーリー・インタビューにおける課題について若干言及したい（第6節）。

2. ライフストーリーとは何か

この節では、アトキンソン（Atkinson 1998）の議論から、ライフストーリーとはどのような研究方法なのか検討したい。アトキンソンはライフストーリーを次のように定義している。

「ライフストーリーとは、ある人が自分が生きた人生の中で話すことを選んだストー

こにし なおゆき（幼児教育学科）

リーのことであり、できるだけ完全に正直に話されたものである。また、人生の中で思い出されたものであり、さらに、語り手が人生の中で他人に知ってほしいと思うことである。たいてい、別の人により導かれたインタビューの結果である。」
(Atkinson 1998, p.8, 引用者訳 (以下も同様))

アトキンソンの定義に従えば、ライフストーリーとは、語り手が「他人に知って」もらうために「話すことを選んだ」内容を「完全に正直に」話すストーリーのことである。通常、それは語り手と聞き手のインタビューの形式を取る。さらに重要な点は、ライフストーリーは語り手が「最も心地よい形式、スタイルで話される」ということである。ライフストーリーは「人生全体の経験全体をかなり完全に物語る」ものであり「最も重要な側面を強調」するものである (Atkinson 1998, p.8) 。

ただし、ライフストーリーとして話された内容が常に真実であるとは限らない。時には「思いつき」や「でっち上げ」さらには語り手による「戦略的なストーリー」が語られることもある。アトキンソンによれば、そのような場合、語り手はその内容が真実か嘘かを明らかにする必要はないという。語り手が「選んだ方法でストーリーを話す機会を与えること」が重要なのである。聞き手がすべきことは「なぜでっち上げの話が選択され、語り手にとってどのような目的にかなうのか」を尋ね、解釈することである (Atkinson 1998, p.9) 。つまり、ライフストーリーにおいては、もちろん話される「内容」も重要なのだが、同様に話される「方法」も重要な情報なのである。聞き手は、話された内容が真実ではないと判断した場合、語り手が真実を話さないことを選択した理由と目的を検討しなければならない。

アトキンソンによれば、ライフストーリーは本質的に学際的な性格を持つ研究方法であり、主に次の学問分野と下位分野における調査に対して利用される (Atkinson 1998, pp.10-18) 。①「心理学的利用」 ((1) 自己、 (2) アイデンティティの発達、 (3) カウンセリングと心理療法、 (4) 人生の物語 (narrative) 研究) 、②「社会学的利用」 (社会言語学的利用) 、③「超自然的 - 宗教学的利用」 (人類学と民俗学) 、④「宇宙論的 - 哲学的利用」、⑤その他 ((1) 教育学、 (2) 老年学、 (3) ジェンダーと文化) 。①～④は伝統的な学問分野に相当するが、⑤のその他にあるように、人間に関わる幅広い新しい分野にも応用できる研究方法である。

3. ライフストーリーの特徴

前節ではライフストーリーという方法論を概観した。ライフストーリーと似た言葉にライフヒストリーとオーラルヒストリーがあるが、この節では主にこの2つの方法との比較を通じて、ライフストーリーという研究方法の特徴を整理したい。

アトキンソン (Atkinson 1998, p.2) は、ライフストーリーが他の研究方法と最も区別される点として、「ストーリーを話すその人自身の言葉においてライフストーリーが表

現されること」を挙げている。ライフストーリーによって記述されたものは「完全に1人称の物語 (narrative) であり、テキストからは可能な限り研究者の影響が取り除かれている」という。このことは、ライフストーリーが「研究者とインタビューによって共同で制作される一次資料」だというだけでなく、「そのライフストーリーに興味を持ち物語的情報やデータを求める他の研究者にとっての二次資料」にもなることを意味する。そして、ライフストーリーが他の研究方法より優れている点は、この「二元的な使用方法」であると指摘している (Atkinson 1998, p.2)。

学問的方法としてのライフストーリーは「オーラルヒストリーやライフヒストリー、他のエスノグラフィックでフィールド的な研究方法」から発展してきた「一人の人間の人生全体の主観的な要素に関する情報を集めるための質的な調査方法」である。ライフストーリーの方法は「学問分野を超えて」用いられ、「人生全体を見る方法」、「個人の人生の綿密な研究を実行する方法」として他の方法より優れているという (Atkinson 1998, p.3)。ライフストーリーは、「時間を超えた一つの人生だけでなく個人の人生が全体とどのように相互に影響し合っているかということをも理解するための、学問分野を超えたアプローチ」である (Atkinson 1998, p.4)。

まず、ライフストーリーとライフヒストリーの違いから見ていこう。アトキンソンによれば、「ライフストーリーとライフヒストリーにはほんのわずかな違いしかなく」、多くの場合「同じことを言葉を変えて言っただけ」である (Atkinson 1998, p.8)。しかし、「求めようとする具体的な情報や最終的な作品は全く異なる」のであり、ライフヒストリーの最終的な形が「何が話され、行われ、暗示されているかがほとんど研究者の記述」であるのに対し、ライフストーリーの成果物は「完全に一人称の物語 (narrative)」なのである。つまり、ライフストーリーは、「インサイダーである語り手の言葉に非常に近い」のである (Atkinson 1998, p.4)。

それでは次に、ライフストーリーとオーラルヒストリーの違いはどこにあるのか。アトキンソンによれば、両者の違いは多くの場合「強調点 (emphasis) と範囲 (scope)」である。オーラルヒストリーは例えば「職業生活」や「地域社会での特別な役割」など、「人間の人生の特別な側面」や「特別な出来事、問題、時間あるいは場所」に焦点を当てることが多いという。それに対して、インタビューが語り手の「人生全体に焦点を当てる」場合、「たいていライフストーリーかライフヒストリーとして分類される」のである (Atkinson 1998, p.8)。

以上のように、アトキンソンは、ライフストーリーとオーラルヒストリーの違いは示しているが、ライフストーリーとライフヒストリーの違いに関してはあまり自覚的ではなかったようである。そこで、以下では日本の代表的なライフストーリー論者である桜井 (2002, 2005, 2012) の議論を参考にしながらライフストーリーとライフヒストリーの違いを確認したい。

桜井も「ライフストーリーは、ライフヒストリーと最も親近性が高く、そこに出自を

求めることができる」と認めながらも、ライフヒストリーでは「その描かれる人生が主に時系列的に編成されている」点がライフストーリーとは異なると指摘している（桜井 2012, 9頁）。ライフストーリーの典型的な描き方のパターンとしては「幼年期、教育期、就職、結婚などのライフ・ステージや人生で遭遇したさまざまな出来事を含むもの」であるという（桜井 2012, 9頁）。桜井によれば、ライフヒストリーはライフストーリーを含む上位概念であり、「個人の人生や出来事を伝記的に編集して記録したもの」である（桜井 2002, 58頁）。また資料としても、ライフストーリーは主に「インタビュー行為によって生み出されるもの」（桜井 2005, 9頁）であるのに対して、ライフヒストリーはインタビューによるライフストーリーの聞き取りだけでなく、他者の話、日記や手紙などの文字資料や専門的知見を含んだ文献資料などによって構成される（桜井 2002, 58頁）。

さらに、このような使用する資料以外の点で方法論的にライフヒストリーとライフストーリーを区別する点は、調査者自身の存在である。ライフヒストリーが「対象者の現実のみを描いて調査者を見えない『神の目』の位置に置く」のに対し、ライフストーリーは「調査者の存在を語り手と同じ位置に置く」（桜井 2002, 61頁）のである。つまり、被調査者ではなく調査者の位置付けが異なるのであり、ライフストーリー法によるインタビューは、調査者と被調査者の相互作用による「共同行為」（桜井 2002, 66頁）と言うこともできる。

そのような方法論と関係しているのかもしれないが、ライフストーリー研究では調査対象にも特徴が見られる。ライフストーリーは歴史的に、マイノリティや被差別者や逸脱者を調査対象としやすい。長年、被差別部落でライフストーリー（ライフヒストリー）研究に取り組んできた桜井自身は、ライフヒストリーからライフストーリーに調査のスタンスが変化してきたと述べている（桜井 2002, 8-9頁）。

ちなみに、桜井によれば、調査対象の点ではライフストーリーはむしろオーラルヒストリーに近くなる。御厨（2002）はオーラルヒストリーを「公人の、専門家による、口述の記録」（御厨 2002, 5頁）と定義し研究対象を政治家などのエリートに限定したが、桜井はこれを誤りだとし、オーラルヒストリーはむしろ「これまで声が聞かれなかった人びと」、つまり「女性や被差別民、少数民族などのマイノリティ」の声を歴史叙述に活かすためのものであったと指摘する（桜井 2012, 12頁）。オーラルヒストリーは、公文書などの文字記録による「上からの歴史」に対して、文書記録がない民衆史などの「下からの歴史」叙述に利用されることが多いという（桜井 2012, 11頁）。

それでは、桜井はライフストーリーとオーラルヒストリーの違いはどのようにとらえているのか。桜井は次のように述べている。オーラルヒストリーにおいても「語りは個人の人生や過去の出来事の経験に触れる」が、「あくまでも研究関心は個人の人生や生活にあるのではなく歴史叙述にある」点がライフストーリーとは異なる特質である（桜井 2012, 11頁）。この点は、アトキンソンの、ライフストーリーとオーラルヒストリー

は「強調点 (emphasis) と範囲 (scope) 」 (Atkinson 1998 p.8) が異なるという指摘に近いものと考えられる。

4. ライフストーリーの方法

前節ではライフストーリーの特徴を他の方法との違いを中心に確認した。この節では、実際にライフストーリー・インタビューを行う際に、どのような点に注意して計画を立て、インタビューを行い、さらにその結果を解釈すればよいのか、という点について見ていくことにする。

(1) ライフストーリー・インタビューの計画

ライフストーリー・インタビューはどのように実施すればよいのか。アトキンソンによれば、ライフストーリー・インタビューには次の3つの段階があるという。すなわち、(a) 「インタビューの計画 (プレインタビュー)」、(b) 「インタビューの実施 (インタビュー)」、(c) 「インタビューの文字起こしと解釈 (ポストインタビュー)」である (Atkinson 1998, p.26)。一人を対象にインタビューする時間・回数はどれくらいが適当か。アトキンソンによれば、「時間は最も重要な要素」であり、「3時間から5時間のインタビューを2～3回行う」のが適当だという (Atkinson 1998, p.25)。

アトキンソンは「インタビューの基本的な指針」として次の13項目を挙げている (Atkinson 1998, pp.27-36)。①「インタビューしたい人を決める」、②「目的を説明する」、③「準備する時間を取る」、④「写真を利用する」、⑤「適切な設定を行う」、⑥「ストーリーを手に入れる」、⑦「自由回答式の面接を行う」、⑧「インタビューは会話ではない」、⑨「すぐに反応し、柔軟に」、⑩「良い案内者になる」、⑪「よく聞く」、⑫「感情が現れる」、⑬「感謝する」。以下では、このガイドラインのうち、いくつかの点について詳しく検討していこう。

まず、①「インタビューしたい人を決める」では、インタビュー対象者は「高齢者だけではなく、あらゆる年齢の人々が対象となる」とし、「10代の人が高齢者と同じくらい強力で重要なストーリーを持っているかもしれない」と述べている (Atkinson 1998, p.27)。ライフストーリーは、高齢者がこれまで生きた長い人生を振り返るためのものだけではなく、若年者も対象になりうることを指摘していることが注目される。なお、この若年者に対するライフストーリー・インタビューの可能性については次節で詳しく述べる。

次に、⑦「自由回答式の面接を行う」では、「あらかじめ質問を用意して、インタビュー中もきちんとそれに従えば、回答もあらかじめ用意されたものになりやすく、表面をすくい取るだけになる」とし、「あらかじめ計画したことから離れ、その人があなたに話したいことをより捕えられるような、自由に流れる会話に入っていく」ことの必要性を指摘している (Atkinson 1998, p.32)。質問項目をあらかじめ決めたものに限定

しないことが重要なようである。

さらに、⑧「インタビューは会話ではない」では、インタビューは「会話のようなものだが、会話ではない」という。それは「相手は話す人であり、あなたは聞く人である」ということである。さらに、聞き手の役割は、自分の「知識と声は出しゃばらない (in the background)」ようにして、語り手に「援助と激励を与える」ことだとする (Atkinson 1998, p.32)。

そして、⑨「すぐに反応し、柔軟に」では、語り手の「興奮が新たな段階に達した」時に、聞き手の役割は「案内者 (guide)」から「追跡者 (follower)」に変化する必要があるという (Atkinson 1998, p.32)。あくまでも主役は語り手であり、語り手の状況の変化を見て、聞き手は柔軟に対応しなければならないのだろう。

この点に関しては、次の⑩「良い案内者になる」でも指摘されている。語り手は「その話題について自分が十分に話したかどうか」ということや、逆に「その話題に深く入り込んでいくことに聞き手が本当に関心があるかどうか」ということに対して不安であるという (Atkinson 1998, p.33)。聞き手は語り手が話しやすいように導く、良い「案内者 (guide)」でなければならない。また、アトキンソンは別のところで、聞き手の役割は、母である語り手がストーリーという赤ん坊を産みだすのを助ける「産婆 (midwife)」であると比喩的に表現している (Atkinson 1998, p.38)。

(2) ライフストーリー・インタビューの実施

アトキンソンが勧めるインタビュー法は「融通のきく、自由回答式の方法」 (Atkinson 1998, p.40) であり、「自由な反応や深いコメントを引き出すような、形式ばらない方法」 (Atkinson 1998, p.41) である。さらに、「役に立たない質問」として「『はい』か『いいえ』で答えられる質問 (yes-no question)」を挙げ、このような「閉じた質問 (closed question)」はその後すぐに「『なぜ』あるいは『どのように』の質問 (“why” or “how” question)」がなければすぐに終わってしまうとしている (Atkinson 1998, p.40)。一方、「役に立つ質問」は「自由回答式の、記述的な、構造的な、対照的な質問」である (Atkinson 1998, p.41)。インタビューを始める前に、聞き手は「最終的に語り手について何を調べたいか」を知っている必要があるが、同時に「ライフストーリー・インタビューが構造的でなければならないほど、より効果的にその人が話したい方法で自身のストーリーを語ってくれる」とも述べている (Atkinson 1998, p.41)。

アトキンソンは「聞くべき質問」として次の11項目を挙げている (Atkinson 1998, pp.43-53)。①「誕生と家族の起源」、②「文化的状況と伝統」、③「社会的要因」、④「教育」、⑤「恋愛と仕事」、⑥「歴史的な出来事・時期」、⑦「引退」、⑧「精神的な生活と意識」、⑨「主な人生のテーマ」、⑩「将来の見通し」、⑪「終わりの質問」。次節で検討する、若年者に対するライフストーリー・インタビューでは、このうち、④

「教育」、⑤「恋愛と仕事」、⑥「歴史的な出来事・時期」、⑩「将来の見通し」の4つの質問項目が有効であろう。

アトキンソンはそれぞれの項目について具体的な質問文を多数挙げている。例えば、⑤「恋愛と仕事」の項目では主に仕事に関して次のような質問文が例示されている (Atkinson 1998, p.48)。「子どものころ (青年のころ)、あなたは夢や抱負がありましたか」、「あなたはやりたかったことを達成しましたか、あるいはあなたの抱負は変化しましたか」、「どのような出来事や経験があなたに大人としての責任を認識させましたか」、「あなたのこれまでの仕事は満足するものでしたか、あるいはその仕事はあなたが時間を注ぐべきものでしたか」、「あなたはいつ自分が大人になったと認識しましたか」など。このように、やや形式的ではあるが、初心者役に役立つ文例が豊富である。

(3) ライフストーリー・インタビューの解釈

インタビュー後の作業には、①「文字起こし」と②「解釈」の2つの段階がある (Atkinson 1998, p.54)。解釈の際の基準については、「人生の研究についての物語的 (narrative) アプローチは、真実性や妥当性といった外的基準よりも、その人が経験したことの内的一貫性 (internal coherence) を重視する」という (Atkinson 1998, p.61)。これは、ライフストーリー・インタビューでは「客観性 (objectivity)」と「主観性 (subjectivity)」のバランスが重要だが、主観性がより重視されることとも関係している (Atkinson 1998, p.58)。

ストーリーが持つ意味については、アトキンソンは「自分の人生について最終的に意味があると思うこと」は「比喩や比較、特別な言葉によってしばしば表現される」と述べている (Atkinson 1998, p.64)。語り手が示す微妙な言語表現や感情表現などに聞き手は注目しなければならない。

また、アトキンソンによれば、ライフストーリーなどの質的調査では、仮説や理論をあらかじめ設定してから行う量的調査とは順序が逆となる (Atkinson 1998, p.66)。つまり、ライフストーリー・インタビューでは「インタビューが終わるまで理論的な前提は少なくとも保留しておいて、どのような理論がストーリーから浮かび上がってくるかを見るのが最も良い方法」なのである (Atkinson 1998, p.66)。さらに、インタビュー後に「適用される最も優れた理論とは、データが語るストーリーに対するあなたの理解を広げ、深めるもの」になるという (Atkinson 1998, p.66)。あくまでも「理論はストーリーにぴったり合う場合に限り、適用される」のである (Atkinson 1998, p.67)。

しかし、ライフストーリー・インタビューの場合、このような「理論的な解釈 (theoretical interpretations)」以上に重要になってくるのが、「主観的な解釈 (subjective interpretations)」である。アトキンソンは「主観的にライフストーリーを分析するための3つの重要点」として、①「評価せずに関連性を示す」、②「ライフストーリーはテキストである」、③「語り手と聞き手はお互いに教師である」ということ

を挙げている (Atkinson 1998, pp.69-71)。

ただし、理論と主観は常に対立するものではない。アトキンソンは、「注釈 (commentary) という観点からは、理論的であること (theoretical) と主観的であること (subjective) は時には結合する」とも述べている (Atkinson 1998, p.71)。「注釈 (commentary)」とは、ライフストーリー本文の前に置かれる、インタビューの状況設定や語り手の個人的情報などを記した短い説明の文章のことである。ライフストーリーを読みやすくするための注釈があるおかげで、「語り手の言葉が聞き手の視点によって補われる」のである (Atkinson 1998, p.72)。

5. 「ショート・ライフストーリー」の可能性

これまでは主にアトキンソン (Atkinson 1998) のテキストを参照しながら、ライフストーリー・インタビューの特徴や実施上の要点・注意点などを概観してきた。以上のライフストーリー法の基本的な理解を踏まえ、この節では、高校卒業生に対する追跡調査にライフストーリー法を取り入れる際の可能性について検討したい。

社会学者の吉川 (2001) は、「青年期の群像を追う」方法として「ショート・ライフヒストリー」という概念を提起している (吉川 2001, 23頁)。吉川は、1992年度の島根県のある高校の3年生1クラスの生徒を対象に、2001年まで断続的に質問紙調査やインタビュー調査を行い、地域移動の状況を追跡調査した。吉川は、学校資料の分析に加え、質問紙パネル調査とインタビュー調査を実施しており、「質的調査と量的調査の中間的な手法」と表現した上で、大規模調査でも個人史研究でもなく、その中間に位置する研究として、「メゾレベル (中間的水準) の群像」を描くことを目的としている (吉川 2001, 20頁)。

吉川は「高校卒業後の六年間というインターバルは、パネル調査としては適切な設計だと自負しているのだが、ライフヒストリーを追うには少し短い期間である」と述べた上で、「通常ライフヒストリーとは、各人の二〇～五〇年の人生 (ライフ) の軌跡 (ヒストリー) を記述して、様々な生活環境の変化と個人の変貌を対象とする研究を意味する場合が多い」としている。さらに、「ショート・ライフヒストリー」に関しては、吉川自身が「そういう言葉があるかどうかはわからない」 (吉川 2001, 23頁) と断っているように、方法論として確立したものではない。

高校卒業生の追跡調査 (インタビュー調査) の場合、吉川 (2001) と同じく卒業後数年間という短期間の内容を聞くわけなので、「ショート・ライフヒストリー」という概念が参考になる。さらに、個人の人生における短期間の変化の記録を得ることを目的とし、調査者と被調査者の相互作用を重視する考え方から、「ショート・ライフストーリー」という方法を提案したい。もちろん、このような言葉も「ショート・ライフヒストリー」同様、存在するのかわからない。しかし、心理学者のやまだ (2005) は、「たとえ短い時間スパンを扱ったり、特定の瞬間だけを扱っても、ライフストーリー

研究である」(やまだ 2005, 198頁)と述べているように、短い期間の「ライフストーリー」研究も可能だと考える。前節まで検討してきたアトキンソンも、ライフストーリー・インタビューは「高齢者だけではなく、あらゆる年齢の人々が対象となる」(Atkinson 1998, p.27)と述べているように、若年者に対しても有効な方法であると考ええる。

さらに、やまだ(2005)は、ライフストーリー研究には、「『転機』『卒業』『事故』など特定のイベントを中心に聞く研究」(やまだ 2005, 192頁)も含まれるとしている。特定のイベントを聞くことに関しては、デンジン(Denzin 訳書 1992)の「エピファニー(Epiphany)」という概念が参考になる。「エピファニー」とはもともと、「東方の三博士の異教徒にキリストが顕現したことを記念して、一月六日に祝う祭り」を表す言葉であり、その意味では「キリスト教的神の現れや印」である(Denzin 訳書 1992, 9頁)。デンジンは「エピファニー〔劇的な感知〕」を「個人の特質を照射し、しばしば個人の人生における転換点を示す問題的経験の瞬間(契機)」と独自に定義している(Denzin 訳書 1992, 221頁)。さらに、デンジンはエピファニーを4つのタイプに分類した。すなわち、①「主要なもの」、②「累積的なもの」、③「副次的で照射的なもの」、④「再体験的なもの」である(Denzin 訳書 1992, 13頁)。そして、エピファニーを「対象者の人生を取り囲む、より大きな歴史的、制度的、文化的舞台内に生ずる」と位置付けている(Denzin 訳書 1992, 14頁)。若年者に対するインタビューにおいても、そのような人生の「転機」を「エピファニー」としてとらえ、分析することが有効だと考える。

高校卒業生に対する調査では長い人生の中での、卒業後の数年間という短い期間を扱うことになる。しかし、その10代後半から20代前半までの短期間に、調査対象者は「進学」「就職」「結婚」「転居」など、いくつかの大きなライフイベントを経験していることが予想される。片瀬(2003)は社会学の立場からそのようなライフイベントに注目している。片瀬は注目する理由を、ライフイベントが「個人史(ライフ・ヒストリー)と社会史が交錯するところに位置する」からであると述べ、ライフイベント、つまり「人生の出来事」の「積み重ねが個人史を形成し、人間形成に大きな影響を及ぼす」として(片瀬 2003, i頁)。

特定の年齢層に焦点を当てた研究例としては、レビンソン(Levinson 訳書 1992)の「生活構造(life structure)アプローチ」(Atkinson 1998, p.67)が参考になる。レビンソンは35歳から45歳にかけての「人生半ばの十年」にあたる男性40人にインタビュー調査を行っている(Levinson 訳書 1992, 5頁)。調査対象者の構成は、4つの職業(工場の労働者、企業の管理職、大学の生物学者、小説家)からそれぞれ10人ずつである(Levinson 訳書 1992, 31頁)。高校卒業後数年間の追跡調査の場合、レビンソンの発達段階区分では、調査対象者は「大人の世界へ入る時期」(22歳～28歳)にあたる。この時期は「成人への過渡期」(17歳～22歳)と「三十歳の過渡期」(28歳～33歳)の間

に位置し、主な発達課題は「成人期最初の生活構造をつくり上げること」とされている。つまり、「おとなの生活への可能性を模索すること」と「安定した生活構造をつくり上げること」という対照的な課題のバランスを取らなければならない時期である（Levinson 訳書 1992, 110-113頁）。

平野他（2012）は、大阪のある総合学科高校の卒業生に対するインタビュー調査をもとに、「若者の主体変容の社会的・教育的意味を問い直す」試みをしているが、「生徒・卒業生自身のライフコースを高校という場でのかかわりをふまえて比較的長いスパンで関係論的に捉える」方法の重要性を指摘している（平野・菊地 2012, 2頁）。高校教育の意味を、卒業後数年間にわたる個人のライフストーリーの事例を通して検討する方法も今後重要になってくると考える。

6. おわりに

本稿では、アトキンソン（Atkinson 1998）によるライフストーリー法を紹介し、その方法論を日本の高校を卒業後数年しか経っていない若年者に対して適用する場合（「ショート・ライフヒストリー」）の可能性について述べてきた。これまでの議論では、アトキンソンのライフストーリー法をそのまま日本の若年者に適用することは難しいかもしれないが、調査の設計次第では不可能ではないこともわかった。しかし、調査実施には今後いくつか検討しなければならない課題もある。以下では、ライフストーリーによる若年者に対するインタビュー調査の課題について触れておきたい。

本稿で取り上げたアトキンソンはテキストの最後に、ライフストーリー研究に関して「真剣に考慮すべき3つの重要な問題点」を挙げている（Atkinson 1998, pp.74-76）。すなわち、①「声」（語り手の本当の声なのか、聞き手が求めていることを想像した声なのか）、②「複雑さ」（3重の複雑さ＝（1）ストーリーの内容、（2）ストーリーの構成、（3）ストーリーの意味）、③「倫理」（お互いの利益になるためには何が倫理的なのか）、の3つである。この中で、若年者に対するインタビューにおいて最も考慮しなければならないのは、①「声」の問題であろう。

若年者を相手にインタビューする場合、調査者の方が年長である場合が多いので、どうしても権力関係が生じやすい。あらゆる年齢の対象者にとってもそうであるが、調査する側（大学や研究機関に属する研究者）は、調査という行為を行うこと自体が権威的であることを自覚するべきであろう。大多数の人々は調査「する」側ではなく、「される」側である。若年者に対してインタビューする場合には、語り手ができるだけありのままの「声」が出せるように、調査そのものが持つ権威性や「調査者—被調査者」の権力関係に対して、聞き手はより自覚的になる必要がある。

〈文献〉

浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近』勁草書房。

- Atkinson, Robert , 1995, *The Gift of Stories: Practical and Spiritual Applications of Autobiography, Life Stories, and Personal Mythmaking*, Bergin & Garvey. (=2006, 塚田守訳『私たちの中にある物語—人生のストーリーを書く意義と方法—』ミネルヴァ書房) .
- Atkinson, Robert , 1998, *The Life Story Interview*, Sage Publications, Inc.
- Denzin, Norman K. , 1989, *Interpretive interaction*, Sage Publications, Inc. (=1992, 片桐雅隆他訳『エピファニーの社会学—解釈的相互作用論の核心』マグロウヒル) .
- 江頭説子, 2007, 「社会学とオーラル・ヒストリー—ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に」『大原社会問題研究所雑誌』No.585, 11-32頁.
- グッドソン, アイヴァー (藤井泰・山田浩之編訳) , 2001, 『教師のライフ・ヒストリー—「実践」から「生活」の研究へ—』晃洋書房.
- 平野智之・菊地栄治, 2012, 「若者の主体変容が問いかけるもの—関係性=場がつむぐ〈優しいチカラ〉—」日本教育社会学会第64回大会発表資料.
- Holstein, James A. and Gubrium, Jaber F. , 1995, *The Active Interview*, Sage Publications, Inc. (=2004, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティブ・インタビュー—相互行為としての社会調査』せりか書房) .
- 片瀬一男, 2003, 『ライフ・イベントの社会学』世界思想社.
- 吉川徹, 2001, 『学歴社会のローカル・トラック—地方からの大学進学』世界思想社.
- Levinson, Daniel J. , 1978, *The Seasons of a man's life*, Knopf. (=1992, 南博訳『ライフサイクルの心理学』講談社学術文庫) .
- 御厨貴, 2002, 『オーラル・ヒストリー—現代史のための口述記録』中公新書.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚, 2005, 「はじめに」桜井厚・小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房, 7-10頁.
- 桜井厚, 2012, 『ライフストーリー論』弘文堂.
- 圓田浩二, 2001, 「カタルシスと知的創造のインタビュー—方法論的考察—」『社会学評論』Vol. 52, 102-117頁.
- 塚田守, 2005, 「インタビュー調査の反省的検討—理論的枠組みと方法論をめぐって—」『椋山女学園大学研究論集』第36号 (社会科学篇) , 25-34頁.
- 塚田守, 2008, 「ライフストーリー・インタビューの可能性」『椋山女学園大学研究論集』第39号 (社会科学篇) , 1-12頁.
- やまだようこ, 2005, 「ライフストーリー研究—インタビューで語りをとらえる方法」秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロジー』東京大学出版会, 191-216頁.

(平成24年10月31日受付、平成24年11月19日受理)

